

Title	中世日本語における主格表出と活用の変化
Author(s)	小林, 茂之
Citation	聖学院大学論叢,18(3) : 151-163
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=79
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

中世日本語における主格表出と活用の変化

小林茂之

The Evolution of Occurrence of Nominative
Case Particles in Relation to the Change of the
Forms of Verb Endings in Middle Japanese

Shigeyuki KOBAYASHI

The nominative case particles *ga* and *no* have not appeared in sentences with conclusive form (*syusi-kei*) in Old Japanese. They began to appear in such sentences in Middle Japanese. Case theory predicts that an abstract case should be assigned in languages with no morphological case. Contrary to Case theory, this has not been attested to in diachronic studies of Japanese case particles yet. The theory that abstract cases and morphological cases will be independently assigned should be supported the historical data. The conclusive form (*syushi-kei*) and adnominal form (*rentai-kei*) were merged in Middle Japanese. According to traditional studies of Japanese, related nominative case particles came to occur without constraints on forms of verb endings after this change. This paper examines the relationship of forms of verb endings with the occurrence of nominative particles. *Ari*, or be, and *nashi*, or negation, had different forms for old and new conclusive forms and adnominal forms. The relationship of new conclusive forms with the occurrence of nominative case particles was more clearly attested to than that of old conclusive forms in the data of the commentaries of Chinese classics (*syomono*) and *Amakusa-ban Heike Monogatari* (*The Tale of Heike* which was colloquially translated in 16th century). The change of verb endings should be thought of as a clue to language acquisition. As the occurrence of nominative particles evolved, it is thought that changes in these particles was accelerated through language acquisition.

Key words: nominative case particles, Middle Japanese, morphological case, language evolution, language acquisition

1 はじめに

日本語における古代語から近代語にかけての重要な文法的変化に名詞句の後に必ず助詞が表出されるようになったことがある。これは日本語の格における形態論的变化である。本稿では、中世日本語における主格助詞の表出について述語の活用体系の変化から分析する。

2 格助詞の表出の変化と格の関係について

2.1 形態格と抽象格

格理論⁽¹⁾では、格に統語現象の説明原理として重要な役割が与えられている。抽象格が統語的位置によって名詞句に与えられるという理論の枠組では、現代英語のように主格や対格が形態格をもたない言語の格体系を記述するのにうまくいく。

格理論の見方を現代日本語に適用した場合、現代語では格助詞「が」「を」「に」は名詞句に与えられた抽象格の音声表示と考えれば、抽象格と形態格の区別を避けることができる。

しかし、日本語の主格形式⁽¹⁾は、歴史的にはガ・ノ・無助詞(∅)の3種類がある。これらの勢力は、表1のように変化した。古代語では、表1のように無助詞名詞句が少なくない。この場合、無助詞名詞句に抽象格が与えられていると考えることになる。格理論においては、格付とは名詞句の認可の条件と考えられている。⁽²⁾したがって、このような理論では、古代日本語における格助詞を抽象格の音声表示として記述することは困難である。

表1：日本語の主格形式の史的変化

主格助詞	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代
ガ					
ノ					
∅					×

ところで、英語史の上では、14世紀に語順の変動が起こり、格体系から格変化が失われ、同時に語順の固定が始まった。この格に関する変化について、Kiparsky (1997) は、語順つまり統語的位置を形態格とし、格変化から語順の固定への変化を形態格の変化として扱っている。Kiparsky の理論で重要な点は、抽象格を形態格から完全に分離し、抽象格を主語、目的語のような文法関係として捉えていることである (Van Kemenade and Vincent (1997a))。

2.2 日本語の格助詞の表出形と非表出形について

日本語の格助詞は、日本語の文法範疇として重要なものである。現代の日本語においては、名詞句の最後に原則的には現れる。しかし、古代語では、格助詞の表出は現代語のようにほぼ義務的なものではなかった。

格助詞の現れを標示ではなく、表出と呼ぶのは、格助詞が形態格であって、直接抽象格を表すものではないという立場をとることによる。形態格は主格、対格、与格などで、日本語ではそれぞれ「が」「を」「に」である(名詞句全体として)である。他方、抽象格は、Kiparsky(1997)によれば、述語のとり項同士の上位・下位関係と 役割(意味役割)との複合したものである。

抽象格を設けることによって、格助詞の表出形と非表出形との関係は形態格としては異なるが、抽象格は同一であるという関係として捉えられる。したがって、格助詞の非表出から表出への変化は、形態格の体系の移行であると解釈することができる。格助詞の非表出形は、Miyagawa(1989)ではそれ自体では格をもっていないと分析されているが、上のような分析では抽象格をもち、格助詞非表出形自体が形態格の一つである。

もしそれとは反対に、形態格だけを認める立場であるなら、主格や対格に格助詞表出形と非表出形の二種類の形態を認めることになる。「の」「が」(古代語では「の」も主格助詞に含まれる)、「を」を主格や対格と呼ぶのと同列に、助詞非表出形を絶対格(absolutive)と呼ぶことができよう。⁽³⁾しかし、形態格の名称と形態に一対一対応が失われるだけでなく、結局その二つの形態間に共通性を認めることになるので、抽象格と形態格の間の概念の混乱をもたらすことになる。

その意味で、格助詞表出形と非表出形のどちらも形態格として認め、その上で抽象格を設けるといふ分析は、格助詞の非表出 表出への移行を記述する前提となるものである。

3 格の変化の記述とその枠組み

格の変化を記述する枠組みは、格をどう扱うべきであるかという理論的な問題に依存しているようにみえる。しかし、明確な枠組みによって格の変化を記述することで、同時に理論的な枠組みが妥当であるかどうかをデータによって検証することになる。

Miyagawa(1989)による日本語の格変化の記述は、格理論⁽⁴⁾の枠組みによるものであり、日本語の対格の変化に関する一般化が得られるという意味で興味深いものである。しかし、金水(1993)が指摘するように多くの反例が存在し、Miyagawaによる日本語の格変化に関する理論が、正しいことは検証されなかった。

本節では、隣接条件に基づく格理論による格助詞の記述には以上のような問題点があり、代案としてKiparsky(1997)にしたがって、抽象格を形態格から独立させる分析が日本語の格助詞の表出の変化を記述する上で適切であることを指摘する。

3.1 単一化による格の分析について

Kiparsky (1997) は、英語史上の格変化の消滅と語順の固定化に関する研究で、格に関して抽象格と形態格とを厳密に区別する分析を行っている。抽象格に+ - 上位、+ - 下位とが設定され、その素性に応じて形態格が決定されるという分析である。そして、形態格は格変化と語順の二つがあり、英語史上では形態格が格変化 語順に変化したと論じられている。

格の問題に関するこのような分析をとるなら、日本語の格の変化に関する記述上の問題点が解消する。つまり、格付子に関する隣接条件のような構文的条件を設定する必要がなくなる。また、抽象格と形態格とを厳密に区別することによって、格助詞の非表出から表出への変化を、同じ抽象格に対してそれが一体化される形態格の変化と捉えることができる。つまり、格助詞非表出形を他の何かから格が与えられていると考える必要がなくなるのである⁽⁵⁾。

3.2 旧形態格の残存

対格助詞の表出が進行した段階においても、格助詞非表出形の用例が同時に存在した。また、主格助詞についても、中世以降にも格助詞非表出形の用例が同時に存在した。つまり、格助詞が表出されるという顕在的な形態格表示体系に移行した後でも、格助詞非表出の格形式は残存した。

格助詞非表出形は形態的には絶対格とする分析も可能であるが、格助詞表出形が一般化した時代においては、抽象格との対応関係において主格や目的格と対立しているのではなく、主格や目的格と同じ抽象格に対応する形態格である。したがって、格助詞表出形と非表出形とは形態的な新旧の違いである⁽⁶⁾。

また、中世以降、主格助詞の表出が一般化した時代においても、「が」と「の」が併用されながら、「が」に収斂されていった。この過程は、「が」の低い待遇性が中立化していくと共に「の」の高い待遇性が弱まっていき、連体節中に限定されると共に、述語との距離も極めて近い場合に限定されていったというものである。つまり、「の」は主格助詞としては段々と領域を狭めながら、ついには旧形態の主格助詞に変化したことになる。⁽⁷⁾したがって、中世では、旧体系の形態格が残存し、素性を変化させて新体系に組みこまれていったのである。

4 活用の変化と主格助詞の表出

中世初期以前においては、終止形終止文では、主格助詞が表出されなかった。中世に、活用体系が連体形が終止形を兼ねる現在の体系に変化したとともに、終止形 = 連体形終止文においても、主格助詞が表出されるようになったのである。

4.1 主格助詞表出と後続の述語の活用形に関する制約

表2では、後続の述語の活用形に関する制約を示す。奈良時代には、活用語終止形は主格ガ・ノに後続することはなかった。一方、無助詞主格では、後続の述語の活用形に関する制約はなかった。

表2：後続の述語の活用形に関する制約

主格助詞	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代
ガ	非終止形		終止形・非終止形		
ノ	非終止形		終止形・非終止形		連体形
∅	終止形・非終止形				

この制約は平安時代に引き継がれたが、鎌倉時代までには、活用語終止形も主格ガ・ノに後続するようになり、この制約は失われた(野村(1993c))。

- (1) a. 年比ありける侍の、妻に具して田舎に去にけり。(宇治拾遺巻5)
 b. 三尺ばかりなる鯨の、ふたふたとして庭にはひ出たり。(宇治拾遺巻13)
 c. 藁一筋が柑子三になりぬ。(宇治拾遺巻7)
- (1a b)は、主格助詞「の」が表出されている例、(1c)は主格助詞「が」が表出されている例である。

表3：『応永本論語抄』(巻1～4)における「あり・ある」と主格・主題助詞の表出・非表出

述語	∅	が	は	の	合計(S)	が+/の/S%	は/S%
あら	11	3	0	0	14	21.4	0.0
あった	0	0	0	0	0	-	-
あって	1	0	0	0	1	0.0	0.0
あり(用)	9	1	2	0	12	8.3	16.7
あり(止)	83	1	3	0	87	1.2	3.5
ある(止)	2	0	0	0	2	0.0	0.0
ある(体)	36	1	2	15	54	29.6	3.7
あれ(已)	16	0	0	0	16	0.0	0.0
あれ(令)	0	0	0	0	0	-	-
合計	158	6	7	15	186	11.3	3.8

4.1.1 「あり」と主格助詞表出

ラ変動詞「あり」は、終止形と連体形とが形態的に異なる動詞であるので、先にみた活用体系の変化によって、その終止=連体形は「ある」に変化した。

次の表3は、『応永本論語抄』(1430年書写)⁽⁸⁾における「あり・ある」の活用形と主格・主題助詞の表出・非表出の関係である。

しかし、『応永本論語抄』では、「あり」は旧活用体系に留まっていて、終止形終止文の述語は

「あり」である。(2)は、無助詞の用例である。

(2) a. 字に呉音漢音 〇 あり。(7-11)

b. 四家の説 〇 あり。(8-29)

(3)は、主格助詞「が」が表出された用例である。

(3) 孟孫が孝を問し時、樊遲傍にあり。(83-2)

終止形「ある」はないが、連体形「ある」の終助詞を伴う文末用法はそれに準じると考えられる。

次の(4)は無助詞の用例である。なお、主格「の」は連体形「ある」の用例だけである。

(4) a. 日三度吾身にあやまち 〇 あるかと省る也。(38-9)

b. 故に容義 〇 あるそと云。(161-11)

(5)は、主格助詞「が」が表出された用例である。

(5) 不善の行跡があるかと (208-1)

以上のように、『応永本論語抄』では主格助詞の表出は、終止形「あり」、連体形「ある」とともに、少数である。

次の表4は、『論語聞書』(1467年頃)⁽⁹⁾における「あり・ある」の活用形と主格・主題助詞の表出・非表出の関係である。『論語聞書』では、終止形「ある」の用例が終止形「あり」の用例を上回って現れた。

表4：『論語聞書』における「あり・ある」と主格・主題助詞の表出・非表出

述語	〇	が	は	の	合計(S)	が+の / S %	は / S %
あら	10	6	3	1	20	35.0	15.0
あった	1	1	0	0	2	50.0	0.0
あって	0	5	0	0	5	100.0	0.0
あり(用)	2	1	0	1	4	50.0	0.0
あり(止)	47	2	3	0	52	3.9	5.8
ある(止)	39	19	20	1	79	25.3	25.3
ある(体)	22	26	10	20	78	59.0	12.8
あれ(已)	8	3	3	0	14	21.4	21.4
あれ(令)	0	0	0	0	0	-	-
合計	129	63	39	23	254	33.9	15.4

次の(6)は、終止形「ある」の用例であるが、主格「が」が表出されている。

(6) 被盜人も罪がある。(71-上12)

他方、次の(7)は述語が終止形「ある」であるが、無助詞主格である。

(7) 諦と裕とは相似てちつとかわりめ 〇 ある。(68-下2)

このように終止形「ある」で、無助詞主格の用例は少ない。

次の表5は、『毛詩抄』⁽¹⁰⁾における「あり・ある」の活用形と主格・主題助詞の表出・非表出の関

係である。

表5：『毛詩抄』における「あり・ある」と主格・主題助詞の表出・非表出

述語	∅	が	は	の	合計(S)	が+の/S%	は/S%
あら	0	7	0	1	8	100.0	0.0
あった	1	8	1	0	10	80.0	10.0
あって	0	9	0	0	9	100.0	0.0
あり(用)	1	2	1	0	4	50.0	25.0
あり(止)	2	0	1	0	3	0.0	33.3
ある(止)	0	17	7	0	24	70.8	29.2
ある(体)	4	42	8	18	72	83.3	11.1
あれ(已)	2	7	2	0	11	63.6	18.2
あれ(令)	0	0	0	0	0	-	-
合計	10	92	20	19	141	78.7	14.2

調査の範囲(巻1)では、終止形「あり」の用法には、主格「が」「の」の用例はなく、(8)は無助詞の用例である。

(8) 路州の壽安県の西北に召公の廟∅あり。(90-8)

他方、終止形「ある」の用法には、無助詞主語の用例はない。

(9) a. その博士に毛公と云者がある。(5-10)

b. 我下に百二十人の女がある。(29-1)

ほぼ、終止形「ある」が定着し、主格「が」が表出された用例の進行が著しい。

次の表6は、『天草版平家物語』(1539年)における「あり・ある」の活用形と主格・主題助詞の表出・非表出の関係である。

表6：『天草版平家物語』における「あり・ある」と主格・主題助詞の表出・非表出

述語	∅	が	は	の	合計(S)	が+の/S%	は/S%
あら	11	18	13	7	49	51.0	26.5
あった	18	44	45	14	121	47.9	37.2
あって	11	14	1	0	26	53.9	3.9
あり(用)	3	1	3	0	7	14.3	42.9
あり(止)	5	0	0	0	5	0.0	0.0
ある(止)	8	44	14	1	67	67.2	20.9
ある(体)	23	13	12	14	62	43.6	19.4
あれ(已)	6	8	10	0	24	33.3	41.7
あれ(令)	0	0	0	0	0	-	-
合計	85	142	98	36	361	67.7	27.2

『天草版平家物語』においても、終止形「あり」の用法には、主格「が」「の」の用例はなく、(10)

は無助詞の用例である。

(10) 薩摩湯沖の小島にわれ_〇ありと、親にはつげよ、八重の塩風 (66-16)

(10)のように、終止形「あり」の無助詞の用例は和歌や格言であって文体として解釈され、当代の口語でない。

次の(11)は、終止形「ある」の用法である。

(11) a. 異国にさるためし_がある。(51-3)

b. 小松殿に騒ぐこと_〇あると、きこえたれば:(50-4)

(11a)は主格「が」の用例、(11b)は無助詞の用例である。『天草版平家物語』においては、表6のように前者が後者よりも圧倒的に多い。

4.1.2 「なし」「ない」と主格助詞表出

「なし」は、「あり」と同じく、終止形と連体形とが形態的に異なるので、その終止=連体形は、先にみた活用体系の変化とイ音便化によって、「なき」「ない」に変化した。

次の表7は、『応永本論語抄』における「なし・ない」と主格・主題助詞の表出・非表出の関係である。

表7：『応永本論語抄』における「なし・ない」と主格・主題助詞の表出・非表出

述語	〇	は	の	合計(S)	が+の / S %	は / S %
なく	11	0	0	11	0.0	0.0
なかった	0	0	0	0	-	-
なう(音便)	0	0	0	0	-	-
なし(止)	48	2	0	50	0.0	4.0
ない(止)	0	0	0	0	-	-
なき(体)	25	6	6	37	16.2	16.2
ない(体)	0	1	0	1	0.0	100.0
なかる	1	0	0	1	0.0	0.0
なけれ	4	2	0	6	0.0	33.3
合計	89	11	6	106	5.7	10.4

「なし」の活用体系は、終止・連体が合流していない旧体系であり、終止形終止文の述語は「なし」である。(12a b c)のように、調査の範囲(巻1~4)では、述語が終止形「なし」の場合に終止形終止文で主格助詞非表出となるだけでなく、他の活用形の場合にも「が」が表出された用例はない。

(12) a. 不審を立て問こと_〇なし。(92-7)

b. 万里を容容して残す事_〇なきと云心なり。(8-4)

c. 道_〇なけれは也。(120-6)

調査の範囲(巻1~4)の主格助詞が表出された用例では、(13)のように連体形「なき」の場合に「の」が表出された用例だけであった。

(13) 地に石のなき所は皆土也。(71-4)

次の表8は、『論語聞書』における「なし・ない」と主格・主題助詞の表出・非表出の関係である。

表8：『論語聞書』における「なし・ない」と主格・主題助詞の表出・非表出

述語	∅	が	は	の	合計(S)	が+の / S %	は / S %
なく	2	5	1	0	8	62.5	12.5
なかった	0	0	0	0	0	-	-
なう(音便)	0	4	0	0	4	100.0	0.0
なし(止)	2	0	0	0	2	0.0	0.0
ない(止)	0	11	12	0	23	47.8	52.2
なき(体)	4	0	0	0	4	0.0	0.0
ない(体)	1	7	8	7	23	60.9	34.8
なかる	0	0	0	0	0	-	-
なけれ	1	5	1	0	7	71.4	14.3
合計	10	32	22	7	71	54.9	31.0

(14a)は、終止形「ない」で主格「が」の用例、(13b)は、終止形「なし」で無助詞の用例である。

(14) a. 此文に理がない(62-下6)

b. 悪き∅ことなし(70-下19)

旧終止形「なし」は少数例であって衰退しているが、無助詞であり、他方、新終止形「ない」は「が」表出または「は」表出の用例だけであって、助詞表出との関係が強い。

次の表9は、『毛詩抄』における「なし・ない」と主格・主題助詞の表出・非表出の関係である。

表9：『毛詩抄』における「なし・ない」と主格・主題助詞の表出・非表出

述語	∅	が	は	の	合計(S)	が+の / S %	は / S %
なく	1	4	1	0	6	66.7	16.7
なかった	0	3	5	1	9	44.4	55.6
なう(音便)	0	3	0	0	3	100.0	0.0
なし(止)	2	0	0	0	2	0.0	0.0
ない(止)	1	7	8	1	17	47.1	47.1
なき(体)	0	0	0	1	1	100.0	0.0
ない(体)	1	24	11	3	39	69.2	28.2
なかる	0	0	0	0	0	-	-
なけれ	1	5	1	0	7	71.4	14.3
合計	6	46	26	6	84	61.9	31.0

(15a) は、終止形「ない」で主格「が」の用例、(14b) は、終止形「なし」で無助詞の用例である。

- (15) a. 料簡がないが (56-6)
 b. 唐本には注の賢者の二字 〇 なし。(55-7)

『毛詩抄』でも、調査の範囲では『論語聞書』とほぼ同じ傾向が認められる。旧終止形「なし」は少数例であって衰退しているが、無助詞であり、他方、新終止形「ない」は、1例を除き⁽¹¹⁾、主格「が」「の」表出または「は」表出の用例だけであって、助詞表出との関係が強い。

次の表10は、『天草版平家物語』における「なし・ない」の活用形と主格・主題助詞の表出・非表出の関係である。

表 10: 『天草版平家物語』における「なし・ない」と主格・主題助詞の表出・非表出

述語	〇	が	は	の	合計(S)	が+の / S %	は / S %
なく	0	0	0	0	0	-	-
なかった	4	11	26	1	42	28.6	61.9
なう(音便)	1	5	3	0	9	55.6	33.3
なし(止)	5	0	2	0	7	0.0	28.6
ない(止)	2	5	21	0	28	17.9	75.0
なき(体)	1	0	0	0	1	0.0	0.0
ない(体)	6	3	1	4	14	50.0	7.1
なかる	0	0	0	0	0	-	-
なけれ	0	0	0	0	0	-	-
合計	19	26	55	5	105	29.5	52.4

『天草版平家物語』においても、「なし」は少数例である。また、次の(16a,b)のように、「が」表出の用例はなく、他は無助詞または「は」表出である。

- (16) a. われは長袖の身でもなし、(4-20)
 b. 餌をつくして漁をなす時は、多くの魚ありといへども、あくる年には魚 〇 なし (174-3)

次の(17)は、終止形「ない」の用例である。

- (17) a. 老少不定の世界ならば、たれとても定めがない (105-21)
 b. 侍ほどの者の受領検非違使になること 〇 ためしない事ではない (26-23)

(17a) は主格「が」の用例、(17b) は無助詞の用例である。『天草版平家物語』においては、前者が後者よりも圧倒的に多い。これは、終止形「ある」の場合と同じ傾向である。

4.2 主格助詞表出からみた終止形・連体形の合流

表11でみるように、主格助詞の表出は旧終止形終止文において始まっている。したがって、終止形と連体形の合流により、新終止形が成立したことによって、主格助詞が終止形終止文に表出され

るようになったと考えることはできない。したがって、主格助詞表出の増加は、本節で中世の抄物や『天草版平家物語』でみたように、新終止形への切り替えを加速したと考えることができる。⁽¹²⁾

表11は、本節でみた主格助詞の表出を活用形でなく、文構造としてとらえたものである。主節と従属節・連体節において形態格に合流が起きたとみると、形態格が義務的に表出されるようになった変化は、統語構造の変化をもたらせたという見方が可能である。形態は言語習得の手掛かりとして重要であると考えられるので、言語の進展 (language evolution) は世代交代を伴う以上、主格助詞の表出が日本語の文構造の変化をもたらしたとみることができよう。

表 11 : 主格助詞が生起する節に関する制約⁽¹³⁾

主格助詞		奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代	近現代
ガ	主節	-	-				
	従属節						
	連体節						
ノ	主節	-	-				-
	従属節						-
	連体節						
〇	主節					-	
	従属節					-	
	連体節				-		

5 ま と め

日本語の格体系の史的変化を記述するためには、Kiparsky (1997) のように、形態格と抽象格とを区別する格記述が望ましい。主格助詞の表出の増加は、終止形と連体形との合流、言い換えれば、旧終止形から新終止形の切り替えを加速したと考えられる。これが日本語の構文構造の変化であるなら、主格助詞の表出の変化は、形態論的变化の統語論的效果 (Lightfoot(2002a)) であったとみることができよう。

註

- (1) 本稿では、主格を形態格に対する名称として用いる。古代語では、有助詞の主格名詞の他に無助詞の主格名詞も用いられたので、全てを含んだ名称に対して主格形式という名称を用いる。なお、本稿では、形態格に対立する概念として抽象格に対して言及しない。主格助詞の表出に対して複数の要因を求める立場をとっているからである。
- (2) ミニマリスト理論 (chomsky (1995)) における照合においても、無助詞名詞句も格素性を持つと考えられる。
- (3) 一般に絶対格とは、能格言語における自動詞の主語と他動詞の目的語に対する形態格の呼称である。古代語日本語では、他動詞の無助詞主語も同じ形態格であるので、絶対格の指す範囲が拡張されることになる。

- (4) Miyagawa の格理論は、Stowell (1981) の英語の対格付与に関する隣接条件を日本語に拡張したものである。
- (5) Miyagawa のような格理論では、終止形動詞に隣接する一方で、「を」が表出される場合、動詞と助詞のどちらが格付与子であるのかという問題が起きるということに先をみた。しかし、これは格付与子を設定しない理論では解消される。助詞表出形と非表出形とは形態の違いである。また、同様に、動詞に隣接しない「を」非表出形も抽象格を持っていると考えられるので、これを形態格として扱うことができる。
- (6) これは、新旧の統語構造が同時に存在しつつ、競合しているという競合 (competition) モデルとは異なることを意味する。
- (7) 抄物において「の」が属性に専用化された過程は、山田 (1994) で詳しく分析されている。
- (8) 中田祝夫 (1965) の翻刻による。巻 1 ~ 4 は称光天皇宸翰の部分である。なお、例文の後の数字は、同書のページ、行番号。以下の資料も同様。
- (9) 坂詰力治 (1987) の翻刻による。年代は大塚 (1995) の推定による。
- (10) 倉石武四郎・小川環樹 (1996) の翻刻による。
- (11) 以下の例であるが、無助詞の理由は口頭語性が強い文脈であるので、格助詞が無表出になりやすいからであろう。
伯楽が一顧して馬のないと云は可也。(24-1)
- (12) 主格助詞表出の要因については、山田 (2000) は修正していない。小林 (2000) は、主格助詞の形態格との関係を論じた。
- (13) 口頭語では、現代語でも無助詞主格は現れる。

参考文献

- Chomsky, N (1995). *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Kiparsky, P. (1997). The rise of positional licensing. In Van Kemenade & Vincent (1997b).
- Kuroda, S.-Y. (1988). Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. In Poser (1988), pp. 103-143.
- Lightfoot, W. D. (2002a). Introduction. In Lightfoot (2002b), chap. 1, pp. 1-19.
- Lightfoot, W. D. (Ed.) (2002b). *Syntactic Effects of Morphological Change*. Oxford University Press.
- Miyagawa, S. (1989). *Structure and Case Marking in Japanese*, Vol. 22 of *Syntax and Semantics*, chap. 6, pp. 199-246. Academic Press.
- Poser, W. J. (Ed.) (1988). *Papers from the second international workshop on Japanese syntax*. CSLI.
- Stowell, T. (1981). *Origins of phrase structure*. Ph.D. thesis, MIT, Cambridge, Mass.
- Van Kemenade, A. & Vincent, N. (1997a). *Parameters and morphosyntactic change*. In Van Kemenade & Vincent (1997b), pp. 1-25.
- Van Kemenade, A. & Vincent, N. (Eds.) (1997b). *Parameters of morphosyntactic change*. Cambridge University Press.
- Watababe, A. (2002). Loss of Overt Wh-movement in Old Japanese. In Lightfoot (2002b), chap. 10, pp. 179-195.
- 大塚光信 (1995) 「抄物概説」, 『中華若木詩抄 湯山聯句鈔』, 新日本古典文学大系, p.p.57-578, 岩波書店。
- 金水敏 (1993) 「古典語の「を」について」仁田 (1993) 所収, pp.191-224。
- 倉石武四郎・小川環樹 (1996) 『毛詩抄 詩経 (一)』, 岩波書店。
- 小林茂之 (2000) 「中世における主格助詞表出の一変化について」, 『国語と国文学』, 77 (12)。
- 坂詰力治 (1987) 『論語抄の国語学的研究 研究・索引篇』, 武蔵野書院。
- 角田大作 (1991) 『世界の言語と日本語』, くろしお出版。
- 仁田義雄 (編) (1993) 『日本語の格をめぐって』, くろしお出版。

- 中田祝夫（1965）『応永二十七年本論語抄』，勉誠社。
- 野村剛史（1993a）「上代語のノとガについて（上）」，『国語国文』，62（2）。
- 野村剛史（1993b）「上代語のノとガについて（下）」，『国語国文』，62（3）。
- 野村剛史（1993c）「古代から中世の「の」と「が」」，『日本語学』，12（10）。
- 山田 潔（1994）「玉塵抄の主格表現 「ノ」「ガ」の用法」，『国語国文』，63（7）。
- 山田昌史（2000）「主語表示「ガ」の勢力拡大の様相 原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』との比較」，『国語学』，51（1）。